【原著】

新入生の受験校決定理由の特徴と入学時点での「気持ち」および学業成績との関連

吉村　宰（長崎大学）

2008年度から2011年度に実施した新入生を対象とした「入試広報活動」に関する調査データを総合的に分析し，オープンキャンパス参加状況や受験校決定理由，入学時の「気持ち」の特徴を抽出した。また入学時の「気持ち」及び１年時前期の学業成績と受験校決定理由との関連を検討した。その結果，①オープンキャンパス（OC）への参加経験者の割合の年度による違いはない，②OCへの参加時期は高校1年時が増え高校3年時が減っている，③学外説明会への参加者が減っている，④受験校決定時期に大きな変化はない，⑤受験校決定理由に大きな変化はない，⑥入学直後の学生は「期待」していると同時に学力や対人面での「不安」も持つ，⑦積極的な理由で受験校を決定した学生の方が「期待」しており，⑧積極的な理由で受験校を決定した学生の方がそうでない学生に比べ学業成績が高い傾向にある，などが明らかになった。これらの結果を今後の入学者選抜方法改善の方向という観点から考察した。

１．はじめに

長崎大学では2008年度から新入生を対象とした「入試広報活動に関する調査」を実施している。この調査は当初，2006年度と2007年度の夏に長崎大学が行った電車・バス内のポスター広告の認知度の確認と効果の検証を主目的とするものであった。吉村・木村（2010）は，2008年度と2009年度の調査結果を「入試広報活動の効果」の観点から分析し，広報活動には新たに志願者を増やす機能は特になく，すでに志願している者に情報を提供する機能の側面が大きいことを明らかにした。

2009年度の調査からは，受験校決定時期，オープンキャンパスや学外での進学説明会などへの参加，受験校決定に影響を与えたことを中心に，長崎大学を受験するまでのプロセスや受験の動機を把握するとともに，入学時の「気持ち」を確認することを主目的とするようになり現在に至っている。

ところで，吉村・木村（2011）は，一般選抜前期，後期，AO入試，推薦入試それぞれで入学した学生の学務データを比較し，入学後の学業の成否には「入学する意思の強さや，目的意識や学習意欲の高さが関わるだろう」と指摘した。しかしその検証はまだできていない。2008年度から継続して実施しているこの「入試広報活動に関する調査」は，「入学する意思の強さや，目的意識や学習意欲の高さ」を直接尋ねるものではないが，受験校決定時期，オープンキャンパスへの参加，受験校決定に影響したことなどを尋ねており，「入学する意思の強さや，目的意識や学習意欲の高さ」を間接的に，しかし具体的な行動として知ることができるものである。

本稿ではまず2008年度から2011年度までの全4回の調査について，オープンキャンパスへの参加状況，受験校決定理由，入学時の「気持ち」の経年変化を概観しその特徴を抽出する。その上で受験校決定理由と入学時の「気持ち」ならびに学業成績との

関連を検討する。そしてその結果に基づき，学力検査の成績以外で重視すべき受験者の態度や姿勢を指摘し，それらの評価を入学者選抜でどのように扱うかについてその方向性を論じる。

2. 方法

2.1. 調査対象と調査方法

調査対象は各年度の新入生のうち一般選抜（前期，後期），推薦入試，AO入試によって入学したものである。表1に各年度の調査対象者数，有効回収回答数，回収率を示した。

調査は新入生全員が受講する必修科目「教養特別講義」の第1回目に実施した。第1回目は学長による授業であり，全学生が提出すべき書類等も配布される。また，入室時には学生証による出席チェックも行われる。調査票の回収は他の提出すべき書類と併せて行われる。回収率がほぼ100%に近いのはこうした実施方法によるものである。

なお，2010年度の回収率が他に比べて低いのは，2010年度に履修番号が8桁から10桁に増えたが，調査票の履修番号記入欄がこの変更に対応しておらずこれに起因する無効回答が増えてしまったことによるものである。

表1　回答回収状況

入学年度	2008年	2009年	2010年	2011年
調査対象者数	1624	1598	1600	1614
有効回収回答数	1586	1568	1429	1594
回収率（%）	97.7	98.1	89.3	98.8

2.2. 調査内容

表2に調査内容の概要を示した。調査内容は大別すると4種類ある。1つ目は実施している広報活動への参加状況と受験校決定への影響に関すること，2つ目は受験校決定時期，3つ目は受験校決定に影響を与えたこと，4つ目は今（入学直後）の気持ちである。

広報活動に関する質問のうちオープンキャンパス及び学外における説明会については受験校決定の時期やプロセスについての動向を把握するための主要な情報であると考えるので今後も継続して調査する予定である。

受験校決定時期，及び受験校決定に影響を

表2　質問項目

質問項目	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
ポスター広告認知	○			
オープンキャンパス参加	○	○	○	○
学外説明会参加	○	○	○	○
高校内説明会参加	○			
SSH・SPP経験		○	○	○
受験決定時期	○	○	○	○
受験校決定に影響を与えたこと	○	○	○	○
今の気持ち	○	○	○	○

表3　オープンキャンパス（OC）・説明会への参加状況

OC・説明会への参加（%）	2008年	2009年	2010年	2011年
OC参加経験あり	25.5	25.1	26.9	27.3
参加前から志望	69.6	71.1	75.0	70.6
志望の気持ち高まった	86.2	86.3	82.0	85.7
参加時の学年（複数回答）				
高校前	1.0	0.3	0.3	0.5
高校1年	23.5	29.2	29.4	36.1
高校2年	38.6	42.1	41.7	41.1
高校3年	47.0	41.1	41.9	36.1
高卒後	2.0	2.0	0.0	1.1
大学外説明会への参加あり	14.2	13.6	12.6	11.0

与えたことについても上と同様の理由で引き続き調査を継続する予定である。なお，表中斜体で表記した「受験校決定に影響を与えたこと」については，選択肢項目，回答形式が年度によって異なるため年度間で単純には比較できない。

3. 結果

3.1. オープンキャンパス(OC)，学外説明会への参加状況

表3にOCならびに学外での説明会への参加状況を示した。OCへの参加経験者は入学者の25%程度でありその率はわずかに上昇している。

OCへの参加者の多く（70%程度）は参加前から志望しており，参加したOCで志望校を決めるということはあまり期待できない。

OCに参加した者の85%程度が，OCに参加することで本学への志望の気持ちが高まったと回答している。残りの15%程度は志望の気持ちが高まったわけではない。回答者が本学に入学した学生であることを考慮すると，OCに参加しながら志望の気持ちが高まらなかった原因を探り対応する必要がある。

OC参加時の学年は高校3年時が減少し高校1年時が増加している。最近は，高校が進路指導の一環として1年時にOCに集団で参加させることが多くなってきている。ここで見られた変化はそのことの表れだろう。

高校3年時の参加者減少の要因としては高校のOCの位置づけの変化（志望校の情報収集から早期進路指導の一環へ）や開催時期などいくつかの原因が考えられる。

OCとは対照的に学外説明会への参加経験者はわずか

表4　受験校決定時期（あてはまるもの１つ）

受験校決定時期(%)	2008年	2009年	2010年	2011年
高校前	5.6	6.3	6.1	5.3
高校1年	6.6	7.3	6.7	8.0
高校2年	11.1	10.2	8.4	10.5
高校3年夏前	17.3	15.1	16.6	15.7
高校3年秋	13.6	14.4	12.9	14.4
センター試験後	44.1	46.0	47.9	45.3

表5　長崎大学を受験したことに影響を与えたのはどのようなことか
（あてはまるもの３つまで。2011年度は5つまで）

長崎大学受験に影響を与えたこと（%）	2008年	2009年	2010年	2011年
国立大学である	85.6	77.8	81.7	87.3
合格可能生が高かった	46.2	37.2	39.5	46.8
興味のあることが学べる	—	28.7	28.8	39.8
九州地区にある	—	28.9	27.4	35.1
長崎県にある	—	18.2	17.1	30.9
学部・学科に魅力的な特徴がある	—	—	—	29.9
自宅から通える	27.8	25.5	24.3	24.4
高校の先生に勧められた	19.6	14.7	14.1	20.8
受験科目が少ない	—	11.0	13.2	17.3
良い教育が行われている	—	11.0	9.1	13.2
オープンキャンパスに参加した	9.9	6.9	7.1	12.4
大学のHPをみた	16.4	6.7	5.2	12.3
親に勧められた	10.7	5.3	4.5	9.1
志願倍率が低い	—	—	7.2	8.4
設備・施設が整っている	—	2.8	2.8	8.0
研究水準が高い	—	2.4	2.2	4.0
大学説明会・相談会に参加した	5.2	1.5	1.0	2.8
公開講座や出前講義を経験した	—	1.3	1.3	1.7
広報誌を見た	—	—	—	1.1

ではあるが減少傾向にある。学外説明会会場では専門学校等と席を並べることも多い。専門学校等へ生徒の目を向けさせないようにそうした説明会には参加させないと話す高校教員もいる。

3.2. 長崎大学受験決定時期

長崎大学の受験を決定した時期を，「高校入学前，高校1年時，高校2年時，高校3年時夏休み前，高校3年時秋，センター試験後」から選択してもらった結果をまとめたものが表4である。受験校決定時期に目立った経年変化は見られない。

表6　今の気持ち（あてはまるもの３つまで）

今の気持ち（%）	2008年	2009年	2010年	2011年
期待	66.7	63.9	63.8	68.3
安心	10.4	11.7	13.1	9.2
解放	21.8	24.7	27.9	17.6
満足	12.8	12.6	14.3	8.0
不満	3.2	4.4	6.3	2.9
不安（学力面）	52.8	53.2	51.0	54.5
不安（対人面）	39.0	39.1	36.0	47.2
不安（生活面）	29.5	31.0	28.0	37.7
不安（経済面）	20.7	21.4	21.8	16.0

表から分かるように，どの年度もセンター試験後に受験を決定したものが約45%いる。センター試験の成績によって合格可能性が大きく変動するため最終的な決定はセンター試験の結果を待たなければならない。センター試験を課す選抜の募集人員は全体の約80%なので，残りの35%程度はセンター試験の結果を待たずに長崎大学受験を決めていたことになる。これらの学生は積極的に長崎大学を志望して入学していると言えよう。

3.3. 長崎大学受験決定に影響を与えたこと

どの年度の調査でも長崎大学を受験したことに影響を与えたことについて該当する選択肢を選ぶという方法で尋ねた。表5に各選択肢の選択率を示した。選択肢は2011年度の選択率を基準に降順で並べ替えている。ただし選択肢は年度ごとに少しずつ異なる。また2010年度までは選択肢から3つまでを選ぶ回答形式だったが，2011年度では5つまでに変更している。結果を解釈するにあたっては注意を要する。

表から，「興味のあることが学べる・九州にある・合格可能性が高い・国立大学」であることを理由に長崎大学を選んだ学生が多いことが分かる。

これらの選択肢のうち「興味のあることが学べる」以外の選択肢は受験生からみて受動的な要因である。「長崎県にある」「自宅から通える」などの地理的条件も同様である。受験校の選択は必ずしも主体的・積極的な理由で行われているわけではない。

3.4. 「今の気持ち」

2008年度調査から同じ形式同じ選択肢で入学直後の学生の気持ちを尋ねている。表6がその結果である。

どの年度でも「期待」の選択率が最も高く「学力面での不安」がそれに続く。年度による選択パターンの大きな変化は見られないが，2011年度に「対人面での不安」「生活面での不安」の選択率が高くなり「満足」「解放」「安心」などポジティブな気持ちの選択率が低下している。また「満足」と「安心」の順位が入れ替わっている。これがこの年度特有のものなのか全体的な傾向が変化したのかを知るためには，今後も調査を続けその結果をモニターする必要がある。

3.5. 入試区分別にみた長崎大学受験決定に影響を与えたこと

表7　受験校決定に影響を与えたこと：試験区分別

前期（1020名）		後期（261名）		推薦（224名）		AO（89名）	
国立大学である	89.0	国立大学である	85.8	国立大学である	82.6	国立大学である	83.1
合格可能性が高い	53.2	合格可能性が高い	65.9	興味あることが学べる	51.3	特徴ある学部学科	59.6
九州にある	38.0	興味あることが学べる	40.2	特徴ある学部学科	50.9	興味あることが学べる	56.2
興味あることが学べる	35.8	九州にある	34.1	長崎にある	35.7	OC参加	39.3
長崎にある	32.0	特徴ある学部学科	32.6	高校教員からの勧め	32.1	長崎にある	29.2
自宅通学可能	26.9	長崎にある	23.4	九州にある	29.0	高校教員からの勧め	28.1
受験科目が少ない	22.8	高校教員からの勧め	17.2	自宅通学可能	25.4	自宅通学可能	21.3
特徴ある学部学科	22.0	HPを見た	15.3	良い教育教育	24.6	良い教育教育	20.2
高校教員からの勧め	18.5	自宅通学可能	14.9	OC参加	21.9	九州にある	19.1
良い教育教育	11.7	受験科目が少ない	13.4	HPを見た	17.9	施設設備が充実	16.9
志願倍率が低い	11.2	施設設備が充実	7.7	施設設備が充実	13.4	HPを見た	13.5
OC参加	10.2	良い教育教育	6.9	合格可能性が高い	10.3	研究水準の高さ	12.4
HPを見た	10.2	親の勧め	5.7	親の勧め	10.3	親の勧め	10.1
親の勧め	9.6	志願倍率が低い	4.6	研究水準の高さ	5.4	合格可能性が高い	9.0
施設設備が充実	6.1	研究水準の高さ	3.4	説明会参加	5.4	説明会参加	5.6
研究水準の高さ	3.1	OC参加	3.4	公開講座・出前講義参加	3.1	公開講座・出前講義参加	4.5
説明会参加	2.5	公開講座・出前講義参加	1.1	志願倍率が低い	3.1	受験科目が少ない	4.5
公開講座・出前講義参加	1.3	説明会参加	0.8	広報誌を見た	2.2	広報誌を見た	3.4
広報誌を見た	0.8	広報誌を見た	0.8	受験科目が少ない	1.8	志願倍率が低い	1.1

表5中の2011年度について入試区分別に示したのが表7である。「国立大学である」「興味あることが学べる」はどの入試区分でも選択率が高いが，これら以外は入試区分によって特徴が異なる。

一般選抜前期では「合格可能性が高い」ことが重視されている。「興味あることが学べる」が上位にあるものの，他は「九州にある」「長崎にある」「自宅通学可能」「受験科目が少ない」など長崎大学の研究・教育上の特徴を反映した積極的な理由ではない。

一般選抜後期では「合格可能性が高い」ことが前期よりもさらに重視されている。他については一般選抜前期と概ね傾向は似ているが，前期よりも大学の特徴を重視して選択している様子がうかがえる。

推薦入試では「特徴ある学部学科」の選択率が50％を超える。また「OC参加」の選択率も20％を超えており積極的に長崎大学を選んで受験している様子がうかがえる。地理的条件も重視されているのは他の入試区分と同様である。「高校教員の勧め」の選択率が高いのは学校推薦なので当然である。「良い教育環境」の選択率が一

表8　今の気持ち：試験区分別

前期（1020名）		後期（261名）		推薦（224名）		AO（89名）	
期待	66.9	期待	66.3	不安_学力	75.9	不安_学力	79.8
不安_学力	51.7	不安_生活	42.1	期待	73.2	期待	78.7
不安_対人	51.5	不安_対人	40.6	不安_対人	38.8	不安_対人	39.3
不安_生活	39.3	不安_学力	38.3	不安_生活	30.8	不安_生活	23.6
解放	19.0	解放	18.8	不安_経済	14.7	解放	12.4
不安_経済	16.2	不安_経済	18.4	解放	11.6	満足	11.2
安心	9.5	安心	10.7	満足	8.0	不安_経済	10.1
満足	7.6	満足	8.0	安心	6.3	安心	7.9
不満	2.5	不満	5.7	不満	1.8	不満	2.2

表9　受験校決定に影響を与えた要因選択パターン別の
入学時の「気持ち」と1年時前期GPA（一般選抜前期）

選択パターン	人数	「期待」の選択率(%)	1年前期GPA	
			平均	標準偏差
興味のみ	199	79.4	2.72	0.61
興味＆合格可能性	162	77.2	2.57	0.64
合格可能性のみ	375	58.1	2.50	0.64
両方選択なし	273	64.8	2.57	0.63

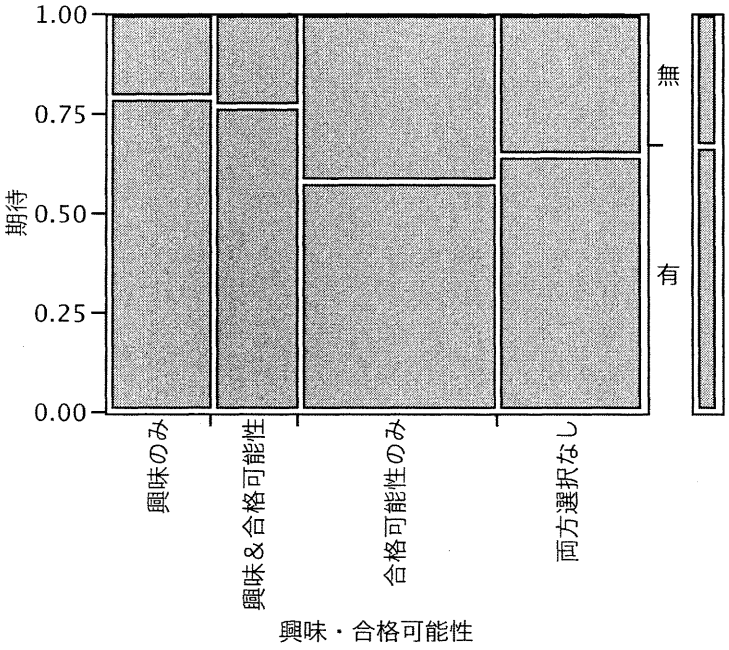

図1　「興味があることが学べる」「合格可能性が高い」の選択・非選択と「期待」との関連

般選抜に比べてかなり高いことも特徴的である。

AO入試の特徴は，推薦入試に見られた大学選択の積極性をさらに強くしたものといえる。「特徴ある学部学科」「興味あることが学べる」「OC参加」の選択率がそれぞれ59.6%，56.2%，39.3%であり，受験大学選択に際しての主体性・積極性は推薦入試以上に高い。

「合格可能性が高い」「受験科目が少ない」「志願倍率が低い」など受験に関する項目の選択率が低いのも特徴として指摘できる。これは推薦入試にもみられる特徴である。一般選抜では受験産業などが合格可能性などの情報を提供しているが，推薦入試やAO入試についてはそのような情報が得られない。また，長崎大学では面接や小論文などで評価するが，面接でどのようなことが問われるのかは公表されていない。さらに面接や小論文の正解例などもない。受験するかしないかの決定に受験に関する情報が，一般選抜と同様には得られないため，参考にしようにもできないという現状を反映していると解釈できる。選択肢は異なるが同様の傾向が他の年度の調査結果にも見られた。

3.6. 入試区分別にみた「今の気持ち」

表6の2011年度分について入試区分別に示したのが表8である。大きく分けると一般選抜の前期と後期，推薦入試とAO入試がそれぞれ似たような傾向を示している。

一般選抜では「期待」の選択率が最も高い。前期は後期に比べて「学力面の不安」と「対人面の不安」の選択率が高い。特に「対人面での不安」の選択率は他の入試区分と比べても高い。後期では「不満」の選択率が他に比べて高い。

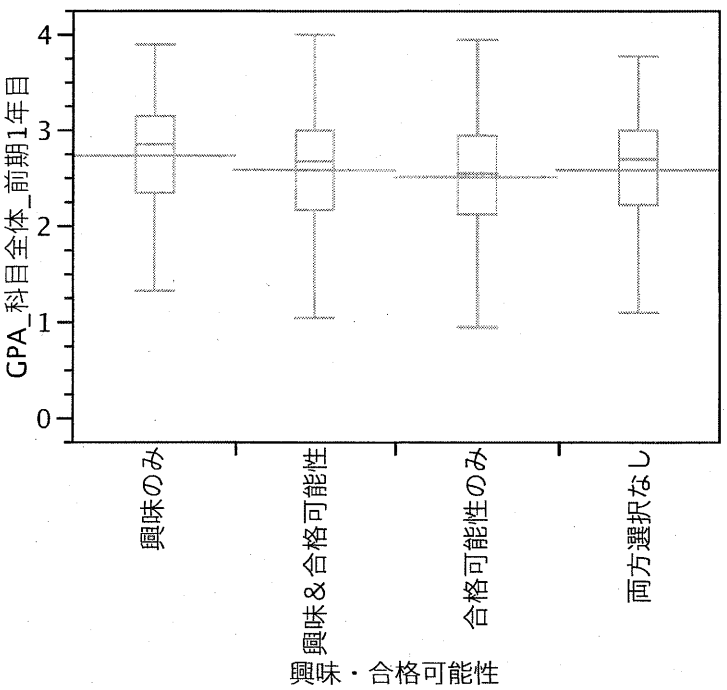

図2　「興味があることが学べる」「合格可能性が高い」の選択・非選択による１年時前期GPAの比較

推薦入試とAO入試では「学力面での不安」の選択率が非常に高い。入学試験で学力検査を課されずに入学したことによるものだと思われる。同時に「期待」の選択率も同じくらいの水準で高く一般選抜のそれを上回る。この期待の高さは，主体的・積極的に長崎大学受験を決めたことのあらわれだろう。

4. 受験校決定に影響を与えたことと入学時の「気持ち」および１年前期GPAとの関係

受験校決定の積極的理由として「興味あることが学べる」（興味）を，受動的理由として「合格可能性が高い」（合格可能性）を取り上げ，その選択パターン別に入学時の気持ち「期待」の選択率および１年前期GPAを集計し表9に示した。分析の対象としたのは一般選抜前期入試による入学者である（1020名，欠損値11）。入試区分の違いによって学生の特性が異なることが予想され，それが分析結果に影響することを避けるためである。

図1，図2はそれぞれ表9に示した「期待」の選択率のモザイク図，1年前期GPAの箱ヒゲ図（平均線を付加）である。

図1から分かるように，「興味のみ」のグループの「期待」選択率が最も高く（79.4％），最も低いのが「合格可能性のみ」（58.1％）である。両者の「期待」選択率には20ポイント以上の差がある。同一の入試区分で入学していても，どのような理由で受験校を決めたかによって入学後すぐの「気持ち」に違いがあることは興味深い。さらに興味深いことに，1年前期のGPAのグループ平均を比較してみると「期待」の選択率と同じようなグループによる大小パターンが見られた。

まとめると，前向きな理由で受験を決めた学生はそうでない学生に比べて，入学時の気持ちも前向きで，入学後すぐの学業成績も高い傾向があるということになる。

5. まとめと考察

本稿では，長崎大学入学者の受験の動機やそこに至るプロセス，入学直後の気持ちの特徴や経年変化を把握し，さらに受験の動機と入学時の気持ち，１年前期GPAとの関連を検討した。

まず4年間の調査を通して，変化がみられたこととみられなかったことについて述べる。

変化が見られたのは，オープンキャンパスへの参加時期である。上で述べたようにこれは高校の進路指導の変化によるものと思われる。志願者を増やすことを目的とし

た自校のアピールだけではなく，高校生の進路指導という観点を積極的に取り入れた高校教育の一環としてのオープンキャンパスを考えていくことも選択肢の一つだと考えられる。

変化がみられなかったものには「受験校決定時期」，「受験校決定に影響を与えたこと」，「今の気持ち」がある。「受験校決定に影響を与えたこと」については設問の選択肢および回答形式が一定ではなく確定的なことは述べられないが，主要な決定理由には変化がみられなかった。また「今の気持ち」については2011年度の結果が他年度とは少し異なる傾向を示していたが大きな変化はみられなかった（ただしこれについてはさらに調査を続ける必要がある）。

「受験校決定時期」は高校の進学指導の影響を強く受ける。現在の高校の進学指導はほぼ定型でありしたがって受験校決定時期にも変化が見られないのだろう。

「受験校決定に影響を与えたこと」にも大きな変化が見られなかった。主な受験校決定の理由は「国立大学である」「合格可能性が高い」「興味あることが学べる」「九州にある」であった。「興味あることが学べる」以外は受動的な理由であり，学生を教育する立場の大学としては好ましくはないが，（経済的に）大学に通えるかどうか，合格できるかどうかは受験校を決めるにあたって非常に重要な考慮すべき事項である。それはそうとしても「合格可能性が高い」という消極的な理由よりも「興味あることが学べる」というような前向きな理由で入学してくる学生が増えることが望ましいことは言うまでもない。

学力検査を課さないAO入試への批判が多いことに対して，吉村ら（2011）は入試区分による学業成績の比較を通して，学業の成否には「入学する意思の強さや，目的意識や学習意欲の高さが関わるだろう」と指摘した。林（2011）も同様の指摘をしている。しかしどちらも学業成績の比較は入試区分間で行われている。

本稿では受験校決定の理由が前向きかどうかで，入学時の気持ちだけでなく1年前期の学業成績までが異なることを，同一の入試区分内（一般選抜前期日程）で示すことができた。これは受験校決定理由，すなわち目的意識や学習意欲・態度が入学後の学業成績に影響を及ぼすことの証拠となりうる。

現在，大学には教育成果をはっきりと出すことが強く要求されている。教育成果は学生が主体的に目的意識をもって学ぶことによってしか生み出されない。それゆえどうすれば学生が主体的に学ぶようになるかが最近の大学教育における大きな関心事の一つとなっている。入学した学生の主体性を高める方策を考えるのも重要であるが，入学者選抜方法をさらに工夫することで主体性・積極性の高い学生を入学させることも今後重要となる。

現在の一般選抜（特に前期日程）は学力検査の結果だけで入学者を決定しているが，ここに何らかの形で受験動機の主体性・積極性を加味して選抜することができれば，大学の教育成果が向上する可能性があることを本稿の結果は示唆する。

参考・引用文献

林寛子（2011）：新たな入学者追跡調査における選抜方法評価，大学入試研究ジャーナル，No.21，159-164.

吉村宰・木村拓也（2010）：新入生を対象とした入試広報活動に関する調査，大学入試研究ジャーナル，No.20，209-216.

吉村宰・木村拓也（2011）：志願・入試・学務データに見られる入学者選抜方法の特徴，大学入試研究ジャーナル，No.21，165-170.